

隠岐郡教育研究会造形部会主催事業
「平成 29 年度 夏季研修会 IN 隠岐」レポート

京都造形芸術大学

アート・コミュニケーション研究センター 研究員

青山 真樹



◆ 8/3(木) 研修会 IN 隠岐の島町

隠岐の島町での研修会は、島内の小学校教諭と県教育委員会職員 15 名が参加する中、福によるレクチャーと、金谷直美先生（みるみるの会）によるワークショップの二本立てで行われた。

前半のレクチャーは、「みる」「発見」「コミュニケーション」という通底したテーマのもと、「みる」という行為や美術鑑賞で培われる能力、京都造形芸術大学で実施されている ACOP の事例など、さまざまなトピックを織り交ぜながら展開された。その中で福は、「ただ、みる」のではなく「意識をもって、みる」ことで新たな疑問や発見が生まれ、主体的な学びが実現されるのだとした。また、三重県総合博物館館長の大野照文先生によるハマグリのはらぎを使用したワークショップの例を紹介し、観察と対話によって学習者間の学びの相乗効果が確認されたという事実にも言及する。「みる」「発見」「コミュニケーション」が、美術に限らず他教科にも共通する要素であることが明示され、参加者には、教育現場の様々な状況に置き換えて考えていただくことができたのではないだろうか。

続く後半では、島根県造形教育研究会監修で作成、県内の全小中学校に配布されているアートカードを使った3つのワークショップが行われ、筆者も飛び入り参加させていただいた。プログラムの詳細については、金谷先生による[レポート](#)を参照されたい。実際に体験してみると、ワークごとの難易度に応じて「作品を観察する」「みえたものから考え、表現する」「解釈の多様性に気づく」「作品の解釈を繋ぎ合わせ、構築し、総合的に思考する」「対話を通してグループ内で合意形成を行う」など、段階を追った学びが設定されていることがわかる。対象者の年齢やレベルに合わせて展開することができるという点で、汎用性の高い教材・プログラムだと感じた。また、「そういう表現の仕方があるのか」「今のは上手くいった」「自分は、こんな風に解釈した」などと参加者同士で声をかけ合う中で、どんどん対話が活発になり、場全体が賑やかに盛り上がっていく様子も印象的だ。「みる」「発見」「コミュニケーション」の力を、具体的な体験を通して考えていただける機会となったように思う。

研修会後のアンケートには、参加者の皆さんが、レクチャー・ワークショップを通して得た様々な気づきが記されていた。以下にその一部を紹介する。

=====

- ・「みる」ことがコミュニケーションにつながることに驚きました。
- ・「みる」ことへの意識。意識することで、世の中が面白くなるんだと思いました。
- ・「どこからそう思ったの？」という具体的で明確な声かけのしかたを学び、図工だけではなく、子供たちの考えを引き出すときに使えそうだと思いました。
- ・正解はひとつではないことが、コミュニケーションを発展させることに気づいた。
- ・対話を通して、授業者も児童も共に学べる。
- ・鑑賞と言われても、どのように行えばわからなかったが、今日の研修で、このようにやればいいのかと発見がありました。

=====

◆ 8/4(金) 研修会 IN 海士町



翌日の海士町での研修会には、町役場や教育委員会職員、教員、学童クラブ支援者、図書館司書など多様な参加者が集まった。「生き延びるために」と題された福のレクチャーでは、まず始めに、人工知能（AI）の大学受験合格に取り組む、あるプロジェクトについて書かれた記事（朝日新聞）が紹介された。そこには、プロジェクトの成果とともに、30年後には今ある仕事の大部分をAIが担うようになるという予測が記されている。そのことを踏まえて、福は「私たちが想像もつかないような世界が訪れるかもしれない」と語り、そのような状況下を生き延びるためには「意味を考えること」と「他者との共生」が不可欠であるとした。

レクチャーはそこから美術における「みる」こと、つまり鑑賞教育の現状や、鑑賞によって培われる様々な能力へと展開する。さらに、ACOPを体験した京都造形芸術大学の学生たちの言葉を引用しながら、アートや他者とのコミュニケーションを通して答えのない問いに取り組み、考え続ける中で、「唯一の正解」に偏らない複数の見方や解釈に気づいていけることを示した。それこそが、AIが未だ到達することのできない「意味を考え」「他者と共生」する力だと言えるのではないだろうか。レクチャーの最後に福は、「ACOPは“コミュニケーションを介した鑑賞教育”であると同時に“鑑賞を介したコミュニケーション教育”である」とし、それは即ち文部科学省が唱える「生きる力：自分で課題を見つけ、自ら考え、主体的に判断・行動し、問題を解決する能力／自らを律しつつ他人と協調する力」を育むものだと言った。

ここ海士町は、人口流出・少子高齢化・財政危機という、多くの地域自治体が抱える問題に独自の発想で挑み続けてきた。これまで行ってきた行財政改革や産業創出、移住者誘致、子育て支援や島留学などの取り組みは、今や地域再生のモデルケースとして注目を集めている。まさに「生き延びるために」他者とともに考え続け、そのための知恵や方法を生み出し実践してきた島だと言えるだろう。この日、約2時間に及ぶレクチャーを聴き終えた参加者の表情は、みな生き活きと明るかった。この場に集った方々が、再びそれぞれの立場から地域に関わる中で、次は一体どんな挑戦が生み出されていくのだろうか。海士町のこれからがとても楽しみになる、そんな研修会だった。



海士町での研修会後は、教育委員会や町役場（本学卒業生がたくさん活躍していたことに驚き！）の皆さんと共に菱浦港で開催されているビアガーデン「潮風納涼祭」へ。毎年恒例となっているこの納涼祭には、島民や帰省中の人、観光客など多くの人が入れ代わり立ち代り集まり、地元食材を使った料理とビールを楽しむのだという。運営は観光協会、海士町役場地産地消課が主体で行っているそうで、アットホームな雰囲気の会場は人々の笑い声と活気に溢れていた。



島内の至るところには「ないものはない」と書かれたポスターが貼られていた。海士町が掲げるこの言葉には、『無いもの』が多い』しかし「大事なものは全てここにある」という2つの意味が込められている。